

再生

木川 雅樹

奇遇

その昼、二宮は神田にあるファミリーレストランで食事をとっていた。ハンバーガーランチを注文し、食べていると、白髪の老人が近寄ってきて、懐かしそうに声をかけた。見知らぬ老人だった。二宮は当惑したが、老人はお構いなしに話しかけ続けた。

二宮はしかたなく老人の顔を見つめた。すると、見知らぬ老人だと思ったその男の顔に高校時代の級友の顔が浮かび上がってきた。二宮は富山県の出身で、その男：たしか、足利と言った、も同じ富山県の高校に通っていた。

「足利…くんだったな？」

最初、二宮が老人だと思っていた男は、薄い笑いを見せてうなづいた。

「失礼、みごとな白髪になってるので、分からなかったよ」

「はっはっは、よく、そう言われるがね」

足利は軽く頭を叩きながら、不敵に乾いた笑い声を上げた。どう見ても足利は七十歳過ぎにしか見えなかった。ちなみに実年齢は二宮と同じ五十歳のはずだ。人間、五十年も生きていれば、見た目年齢にも個人差が出てくるものだ、とは言うが、それにしても、である。

足利は同級生きっての秀才で、頭の回転がよく、驕慢で不遜な笑いを浮かべながら、人を小馬鹿にしたような話し方をするところがあって、二宮には苦手な相手だった。現役で慶応大学に入学し、卒業後は日本に三行しかない長期信用銀行の一つ、国民債券信用銀行の行員となった。そうだ、あの銀行はその後破綻認定され、国有化された後、普通銀行の道を歩んだんだっけ…。

才媛の美女を射止めて結婚したのだが、彼女はその後、民放の花形女子アナウンサーになった。足利は同窓会には顔を出したことはなかったが、同窓生の間では、足利の卒業後の動静はいつも羨望まじりに話題になっていた。

同窓生は皆、足利という男は生涯陽の当たる路を歩き続けているような人物だと信じて疑わなかった。

そんな足利の髪は白髪に変わっているだけではなく、皮膚にも張りも艶もなく、皺だらけで、垢が沈潜して汚らしく見えた。

スーツも上質のものらしくは見えたが、足利にはかつての颯爽、華やかだった頃の面影は微塵も残っておらず、粗末な商品を高級デパートの包装紙で丁寧にくるんだようなチグハグさは拭えなかった。しかし、尾羽打ち枯らした、という雰囲気ではなく、名状しがたい凄みのようなものを全身から放射していた。それは苛酷な運命に翻弄されながらも、足掻き、抗いながら生きてきた証しのようでもあった。いったいこの男の運命に何があったのだ？

「この頭、一晩で白髪に変わった、と言いたいところだが、実はきわめて短期間にこうなってしまったんだ」

「もしかして、ガンにでもなつて、きつい抗癌剤治療でも受けているんじゃないだろうな？」

「そうじゃあないがね、それに類するような、体験は味わったよ」

足利は自嘲的に笑った。二宮は彼の白髪を改めて見つめ、マリーアントワネットがフランス革命の際、ギロチンを宣告されて一夜にして白髪に変わってしまった、という故事を思い出した。

どんな運命に遭遇すれば、あの足利がこれほどまでに無残な、眼光だけが横光りするような男になってしまったのだろうか？

「足利くん、もし、差支えなければ、きみがそうなってしまった経緯を聞かせてくれないか」

二宮はその経緯をぜひ知りたい、とは強烈に思ったものの、触れてはならない領域に足を踏み込んでしまいそうな気もした。

「そうなってしまった？ どういう意味だ？」 足利はムっとしたように口を閉ざし、沈黙した。二宮の知る足利は自分の弱みなど、容易に人にさらすような男ではなかった。

しかし、足利は二宮の軽率な質問にも、意外なことに気を悪くしたようには見えなかった。もしかすると、この沈黙は話してしまおうか、どうしようか、と秘かに葛藤している間なのかもしれない、とも思えた。

「察するに、あまり話したい出来事ではなさそうだね。お互い、富山県出身のおれたちが偶然にも数十年ぶりに東京のど真ん中で出会ったんだ。これを奇縁に、凶々しく訳を聞かせてもらおう、なんて思ったんだが、聞いて、何か力になってあげられるとも思えないし、いいよ、いいよ、そとときみの胸にしまっておいてくれ」

二宮は足利の激変の経緯を知りたい、という思いとは裏腹に、強烈な好奇心に蓋を閉ざした。

訊かないぞ、と意思表示をすれば、人間、逆に話してしまいたくなるものなのかもしれない、とも思った。足利はそんなに単純な男ではなかったが。

しかし、まるで胸奥の巨大な物語の陶器の水甕の壁面に細かい亀裂が走るように、唐突に足利は重い口を開いた。

「ま、いいか。もう、終わったことだし、ひと区切りのついたところで、話してしまってもいいか。高校時代にさして親しかったとも思えないお前だが、こんな所で偶然出会ったのも何かの縁かもしれない。一つ話してみようか」

例えは変だが、凶悪事件の犯人の取り調べに当たっている刑事が、頑強に否認していた犯人が遂に自供を始める瞬間などは、こういうものなのかもしれない、と二宮は感じた。彼は秘かに興奮した。

珍しく、二宮はその日の午後は急ぎの仕事を抱えてはいなかった。

「おれも、ちょうど大きな取引をすませたばかりだ」と、足利も言った。

二人は近くのホテルのラウンジに席を移した。そこで、足利が話したことはこの世で実際に起きた出来事とは到底思えないような数奇な物語だった。

一本の電話

「思えばこの話は最初から幾つもの不可解な点、が重なっていた」

足利はそう前置きをして話を始めた。

はじめりは一本の電話からだった。

「はじめまして、私はリック・チャールトンホテルの副社長、ジョン・B・ウイングゲートと申します」

その外人は流暢な日本語できりだした。初めて聞く名まえだだった。

「はじめまして、足利です」

足利は、とりあえず、そう応じた。昭和六十二年（一九八七）のことだった。当時、足利は国民債券信用銀行という銀行につとめていた。国内には金融債の発行を認められている銀行は三行あったが、国民債券信用銀行はそのうちの一行だった。

「リック・チャールトンホテルでは、日本、および、アジアへの進出を今考えておりました、ね。その案件につきまして、足利さんの知恵とノウハウをお貸し願えなにか、と思ひまして」

その外国人は、初めて電話をかけてきたにもかかわらず、まるであなたのことはよく存じ上げていますよ、と言わんばかりに、足利を持ち上げて言った。

「私のことを、どこでお聞きになられたのですか？」

足利は少し警戒するように尋ねた。

「弊社のリチャード部長が足利さんのことをよく存じ上げておりましたね」

リチャード部長なる人物についても、足利は心当たりはなかった。

「さっそくですが、一度あなたとお会いしたいのですが」

そういうやり取りをした後、結局、彼はそのリック・チャールトンホテルの副社長、ジョン・B・ウィングゲートなる人物と国民債券信用銀行の十階会議室で、会うことになった。

国民債券信用銀行本店は東京都千代田区九段にあった。十五階建ての青黒色の重厚な外観を持った高層ビルだった。

ウィングゲート副社長は、削いだような鼻梁をもつ、したたかさを柔らかな物腰で包み隠したような六十歳ぐらいの紳士だった。後に思えば、典型的なアングロサクソンのエリートとは、こういうタイプだったのかもしれない、と思える。

リック・チャールトンホテルが、フランスのリックと英国のチャールトンとが合併したホテルだということは足利もよく知っていた。シェラトンホテルやヒルトンホテルなどと並ぶ世界最高峰のラグジュアリーホテルだった。

当時、足利もこのような高級ホテルにはたいへん関心をもっており、彼なりに勉強もしていたのだった。

そのような世界のトップクラスのホテルの副社長からのいきなりの名指しの電話だった。

「私どもは、日本、および、アジアへのリック・チャールトンホテルの進出の手助

けを足利さんをお願いしたいのです」

ウイングゲート副社長は、先ほどの電話と同じ内容の話を繰り返した。足利のよ
うな一介の銀行員に、どうしてこのような大きな案件を持ちかけてきたのかは、足
利にとっても不可解な謎だった。

「もう一カ月か二カ月ほど後に、米国ジョージア州アトランタにある、私どもの本
部の会長、W・B・ジョージとデイビッド社長、および、私、副社長ジョン・B・
ウイングゲートとで貴行を訪問させていただきたいと思っています。その際に、
貴行の後藤頭取、日野原副頭取とあなたと御一緒に会食をして、日本とアジアへの
リック・チャールトンホテルの進出の手助けのお願いの正式な申し入れをさせてい
ただきたいと思っております」

足利は、これはとんでもなく大きなビジネスであり、そんな席には、自分などが
同席するより、その日は後藤頭取と日野原副頭取に任せておくべきではないだろう
か、と思った。反面、大きなチャンスが自分に訪れようとしている、という功名心
にも駆られないではなかった。

足利は、元々はホテル経営をしたいという希望を持っていて、郷里の富山市を飛
び出してきたのだった。そのため、慶応大学の二年生在学中に、自民党の綿貫
民輔先生の紹介で、日本航空のホテル部に就職を決めていた。

しかし、折悪く日本はオイルショックに見舞われてしまった。日本航空では、ス
チュワーデスをはじめ、地上職は一名も採用しない、という事態に陥ってしまった
のだった。

そこで足利はやむなく志望を変更せざるをえなくなってしまった。その頃、彼は
国民債券信用銀行という、ホテルや不動産部門に強い銀行の存在を知った。

そこでその銀行に就職を希望することにした結果、昭和~~五~~八年（一九七三）に採
用されることになったのだった。

国民債券信用銀行に入行してから十四年、銀行業務にも習熟し、課長職にも就い
た頃、リック・チャールトンホテルのウイングゲート副社長からの突然の電話を受
けたのだった。

副社長とはじめて会った日から二カ月経ったその日、リック・チャールトンホテ
ル側はW・B・ジョージ会長とデイビッド社長、ジョン・B・ウイングゲート副社
長の三名がそろって銀行を訪れてきた。これに応じて、国民債券信用銀行側でも、

後藤頭取、日野原副頭取、担当の篠原部長、そして、足利の四名で出迎えることになり、七名で東京都千代田区内幸町の帝国ホテルのステーキハウスで会食する、という運びとなった。

会見は、いろいろな日本のホテルの諸事情、世界のホテルの経営環境、ということから入っていった。本題は、もちろん、リック・チャールトンホテルの日本とアジアへの進出についての打診だった。

リック・チャールトンホテルとしては、良い物件があれば、買収ではなく、借りて二〇〇〇〜三〇〇〇室ぐらいのホテルを開業していきたい、という意向だった。どうしても開業したいのは東京と大阪ということだった。そこで、東京ではどの場所、大阪ではどの場所、福岡ではどこ、というように具体的に検討作業に入っていた。

国民債券信用銀行は海外業務を展開していた関係から、後藤頭取、日野原副頭取、篠原部長の三人は英語も得意だった。リック・チャールトン側の三人は元々英語が母国語だった。その日同席した七人の中で、あまり英語をしゃべりたくなかったのは足利だけだった。

彼は、幼稚園の頃から英語の勉強をしていて、大学受験の時には英語の模擬試験は全国で十番ぐらいの成績は取ったのだ。しかし、学生時代、英語で大きく挫折するような体験があったので、英語だけは二度と使わないぞ、心に決めていたのだった。

その時、七名の会見の席順の中で、足利はジョン・B・ウィングゲート副社長に対面する席に座っていた。すでに副社長とは二度ほど会っており、その時は三度目の対面だった。

「足利さん、今日は大人しいですね」と、彼は日本語で話しかけてきた。

「偉い方々がお話しされているので、私はこの場に控えているだけで良いのかな、と思っっているのです」と、足利は少し緊張気味に日本語で答えた。

「じゃあ、私と少し話をしましょうか」と、副社長はくだけた口調の日本語で言った。いつものことながら、足利はどうしてこの人はこんなに日本語が流暢なのだろう、と思った。それは、最初、電話を受けた瞬間から感じていた不可解な印象の一つだった。

「あなたは、ご出身はどちらですか?」と。彼は訊いた。足利は田舎コンプレックスを持っていたので、こういう質問を受けたときには、いつもだと「東京です」と答えるのが常だった。

全面的にご協力してあげてくれたまえ。きみが担当課長なのだから、しっかりやってくれよ。これはきみにとってもビッグチャンスだぞ」と言った。

隣に住んでいた謎の外国人

足利は（おやおや、俺はいつの間に、こんな大きな案件の担当課長になってしまったんだろう？）と、思いはしたが、それほど気負いはなかった。彼にとっては、リック・チャールトンホテルの日本とアジアへの進出の案件よりも、何故その外国人が自分の家の隣に住んでいたのか、ということの方が重大な関心事だった。

その日、彼は東京のマンションに帰ると、富山市の母親に電話を入れた。

「うちの家の隣に外国人が住んでいたことがあるの？」

彼の父母は富山市に住んでいた、と言っても、元々は富山市の人ではなかった。

越後の人であり、新潟県長岡市の出身だった。富山市の家は足利家代々の家ではなく、祖父の代に買い求めて移ってきた家なのだった。

「うちの家の隣に誰が住んでいたのか、私も分からないわ」

それでも、母は昔の話を思い出してくれて、言った。

「そう言えば、隣の家は陸軍の野中中将閣下の家だったそうよ。でも、戦後間もない頃、一時期英国人とオーストラリア人とが住んでいたことがある、とあなたのお祖母さんから聞いたことがあるわ。もしかしたら、その人たちのことかもしれないわね。明日、お祖母さんに聞いてあげるわよ」

翌日の金曜日、母から電話がかかってきた。

「お祖母さんの話では、昭和二十年（一九四五）の二月頃から一年間ぐらい白馬を乗り回す英国人とオーストラリア人が住んでいたそうよ。何故なのかは分からないけれど、外国人が住んでいたというのは嘘ではないようだよ」

足利は日曜日になると、港区乃木坂にあると聞いていたジョン・B・ウィングゲート副社長のマンションを訪ねた。

「副社長、帝国ホテルでの会食の折の副社長のお話、私は度胆を抜かれてしまいましたよ。何故、私の家の隣に住んでおられたのですか？」

「はははは」

副社長は声高らかに笑った。

「私は一九四五年十月二十八日、米国第六軍が富山県に進駐したとき、それに伴って日本に入国してきていたのです。私はGHQでマッカーサー元帥の下で働いていたのですが、元々は英国の秘密情報部員だったのです。私はケンブリッジ大学を卒業した経済学博士として、吉田内閣の戦後政策立案のサポートもさせていただきました。当時、私は電力こそその礎であり、戦後復興の鍵である、と考えておりました。戦前の富山県は小水力発電の盛んな電源王国でした。私は電源開発、とりわけ水力発電の開発こそその答えだと考えていたのです。そこで水力発電の構想づくりのために、富山市に拠点をおいて、調査研究に当たっていました」

「副社長のご専門は経済なのですか？」

「私、今はホテルの経営者なのだけれど、中央大学の経済学部の教授を20年間ほどやっていたこともあるのですよ」

「大学の教授がホテルの経営者なのですか？」

「いや、実は私が一番得意なのは『方丈記』なのです」

「『方丈記』というと、あの鴨長明の『方丈記』ですか？」

「そうです、『ゆく川の流れば絶えずして、しかもとの水にあらず』の『方丈記』です。その『方丈記』を英訳して世界に紹介したのも私なのです」

この方はいへんな知識人であり、日本の文化についても驚くほど深い造詣を持たれた方なのだ、と足利は感嘆した。

「私は幼少の頃から日本に住んでいました」

「どちらに住んでいらっしたのですか？」

「英国大使館です。私の父は英国大使だったのです。そうそう、父は三笠宮様とも親交がありましたよ」

聞けば聞くほど、ウィングゲート氏は毛並の良い、生まれも育ちも立派な本物の英国紳士のようなだった。ケンブリッジ大学の卒業生だということや、皇室、吉田茂元首相など、交友関係も第一級の人たちばかりだった。こういう立派な方が、自分の田舎の富山市で家の隣に住んでいたのだ、と思うと感慨深い思いがあった。

彼は、それまで氏を「副社長」と呼んでいたのだが、中央大学の教授だったと聞いた時点で「先生」と呼ぶようにしたのだった。

「先生、今の先生のお話を聞いておきますと、戦後の日本の電源開発、とりわけ水力発電の開発のために、どのような結論を導かれたのでしょうか？」

「足利さんもよくご存じのように、富山県には飛騨山脈など日本アルプスに源を発する黒部川など、七つの大きな川が流れこんでいます。この豊富な水源を活用して電源開発を進めれば、一大工業地帯が生み出せるはずだ、というのが私のその時の報告の結論でした。私の報告書からは後に黒四ダムが生まれ、富山県には豊富な電力を活用したアルミ工業地帯も生み出されることになりました」

足利は先生の話聞いてるうちに、この方は先見の明のある見識の持ち主であったと同時に、郷里の戦後の発展についてもたいへんな貢献のあった方だったのかもしれない、と思いついた。

足利は彼なりの考えを述べて、「先生、ホテルの『ホ』の字から私に勉強させていただけませんか？」と申し出たのだった。

足利がこの先生から当時学んだことが何だったかと言うと、ホテルビジネスの基本中の基本だった。彼はその後、米国のリック・チャールトンホテルに勉強に行く機会を与えられ、そちらの方で直接指導を受けたりしたわけのだが、そういう機会を通じて、ホテルのフロントに立った瞬間に、そのホテルのランキングから損益状態までパッと分かるように鍛えてもらった。そして、それが後の彼の一番の資産になっているわけでもあるのだった。

「羽田に迎えに来ます」

昭和六十二年（一九八七）の十月頃、足利は先生からいきなり「足利さん、縁があるね、不思議な縁だったね。あなた、今年のクリスマス、お正月は銀行を休めませんか？」と尋ねられた。

「いやあ、まだまだ私は、英語も出来ませんし、クリスマス、正月は休み返上で、勉強しなければいけないのではないか、と思っているのです」

「身体が悪くなった、ということはできませんか？ 十二月二十日から一月十日まで二十日間ほど銀行をお休みなさい」

「先生、何をするのでしょうか？」

「アメリカのホテル事情を見に行きましょう」

足利は狐につままれたような気持ちだった。

「パスポートはお持ちですね？」

「持つてはいますが、新婚旅行の時以来使ったことはないのです」

「羽田に迎えに来ますから、よろしいですね？」

「…」

先生は正しい日本語を話される方だったが、この時はたいへん理解に苦しむ話し方をされるな、と彼は思った。

「羽田に迎えに来ますから」

（誰が？ 誰を迎えに来る、だって？）

（先生が足利を、ということなのか？）

（何のために？）

非常に分らないことだらけだった。

結果的には、羽田ではなく成田だったのだ。

先生は、成田に自家用ジェット機で足利を迎えに来てくれた。彼は、あたかもタクシーに乗るがごとく、たった一人で先生と一緒にそのジェット機に乗り込んだのだった。

乗り込んだ途端にパイロットが挨拶に来た。お抱えのシェフも挨拶に来た。専用のスチュワーデスも二人乗っていて、彼女たちも挨拶に来た。

機内には専用のシャワー付きの広いベッドが備えられていた。テレビ画面には大きな地球図が映し出されていた。

「点滅している明かりが全てリック・チャールトンホテルです」と、先生は足利に説明した。画面上の地球図には20ほどの明かりが点滅していた。パリ、ロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコ、ハワイ…

今ならこのような装置も珍しくはないだろうが、その時の彼には驚嘆すべき仕掛けだった。

「足利さん、どこにお行きになりたいですか？ リック・チャールトンホテルのある所はボタン一つでどこへでも行きますよ」

彼は（嘘だろう）とは思ったのだが、とりあえず「サンフランシスコ」というボタンを押してみた。

「サンフランシスコですね。じゃ、パイロット、サンフランシスコへ」

先生がパイロットにそう指示されると、足利を乗せたジェット機は轟音を上げて機首をサンフランシスコへ向けたのだった。

9時間後、ジェット機は本当にサンフランシスコ空港に着陸していた。ジェット機が到着し、足利が米国への入国審査を済ませると、空港には大きなリムジンが副社長と彼を出迎えに来ていた。車は二人を乗せると、驚くほど静かにスタートを切り、サンフランシスコ市の市街地に入って行った。

リック・チャールトンホテル・サンフランシスコはサンフランシスコ市の中心部に立地していた。三三六室を擁する白亜の宮殿のような五つ星ホテルだった。

足利はすぐに最高級ルームに通された。それから二十日間というものの、次はフェニックス、次はフロリダ、次はニューヨーク……というように、米国内のリック・チャールトンホテルを十軒ぐらい見学して回り、このホテルの全てを見学させてもらったのだった。

同時に、先生はこのホテルの限界をも足利に教えてくれた。

「このような大型のホテルというものは、二十年というスパンで見れば、やがては無くなってしまいうホテルなのです。大型のホテルが淘汰された後に残っていくホテルは日本の旅館のような二十室から三十室ぐらいの小型ホテルになっていくでしょう」

先生は足利に「私はリック・チャールトンホテルの副社長なのだけれど、いずれは独立して、別途小型ホテルの経営をしたいと思っていますのです」と、打ち明けた。

そういうわけで、足利は東京でリック・チャールトンホテルの日本での新しい開業先を探して行くという仕事の傍ら、個人的に先生のライフワークである30室から300室の小型ホテル事業に投資をしてくれる投資家を募るといいう仕事をも手がけていくことになった。

ちなみに大阪のリック・チャールトンホテルは阪神電鉄・梅田駅の横にあるが、それをまとめたのは足利だった。

東京では伊井直彌が殺害された桜田門外の側に東條会館というのがあり、そちらで開業したい、というのが当初のリック側の希望だったのだが、残念ながらこちらの方は話がまとまらなかった。現在、リック・チャールトンホテル東京は港区六本木の旧防衛庁跡地にできている。

先生の小型ホテル事業の方は、マスターズゴルフで有名なジョージア州のオーガスタに、二十室のホテル、サウスカロライナ州のコーヒー豆・綿花の最大の出荷港であるサバナにある二十室の古い歴史をもつ古民家をホテルに改装するという二つ

の案件で投資家を募って行ったのだった。

これらの案件には計三億円の資金が必要だった。足利は日本の裕福な知人をお願いして、三人から三億円の資金を集めた。資金集めには三年かかった。彼は三十八歳になっていた。

実は足利は、三十八歳になったら国民債券信用銀行をやめて、先生と一緒にその小型ホテルの経営をしようと考えていたのだった。

消えた「先生」

だが、三億円の資金を用立てて渡すと、ある日突然、先生はかき消すようにいなくなってしまった。晴天の霹靂だった。

今まで連絡のあった法人に資金を送ったのは間違いないのだが、その資金を、どこで、誰が、いくら保有して、どんな所有形態になっているのか、全く分からなくなってしまったのだった。

それまでに取り交わした書類は確かにあったが、米国の弁護士に見てもらうと、全て偽造だということだった。

つまり、足利が出資を依頼した人たちには元々権利など存在してもいなかった、ということになるのだった。

当然ながら、足利はそういう人たちからは「どうなった?」「どうなった?」と督促されることになった。

悪いことに、出資は為替で決済されていた。当時は一ドル一六十円ぐらいのレートだったので、結局は五億円ぐらいの資金を持ち逃げされてしまったことになるのだった。

足利は、出資者から厳しく責められ、途方にくれて「先生」の行方を探したが、その居場所は多分あそこだろう、という見当はついても、どうやれば物件を押さえることができるのかは分からなかった。

米国には何度も足を運んだが、「先生」の会社は、バージニア州だとか、カリブ海の旧オランダ領の島だとか、いくつもの地域と国に複雑に分かれていて、結果的には全く分からなくなってしまったのだった。

足利の髪がきわめて短期間に白髪に変わってしまったのはこの頃だった。髪だけで

はなく、頭の中まで真っ白だった。

リック・チャールトンホテルの方へも連絡を取ろうとしたが、連絡はつかなかった。そのうちに「ジョン・B・ウイングゲートは既に退職しております」という返事が返ってきた。退職後の連絡先を尋ねても「分かりかねます」という素っ気ない返事があっただけだった。港区乃木坂にあったマンションにも別人が住んでいた。ジョン・B・ウイングゲートはあらゆる手がかりを残すことなく、足利の前から消えてしまったのだった。彼が本当にリック・チャールトンホテルの副社長だったのかどうかも分からない。たとえそうであったとしても、一時的なものであったのかもしれないし、どのような経緯で副社長になりすませていたのかも不明だ。

足利は三人の出資者から執拗に責められ続けた。

この内の一人は、銀行から借入れをして用立ててくれていたのだが、その人はそういう金さえも自腹を切って銀行に返したのだった。

足利は人気キャスターになっていた妻に累が及ぶことを恐れて、離婚を切り出した。「いいわよ」と、妻はあっさり応じた。こうして、足利は妻とも離婚し、国民債券信用銀行もやめて、独立して起業した会社で出資してもらった債務を引き受ける、という形をとることにした。

それでも、厳しい督促はなおも続いた。一人は「命を落としてでも謝れ」と責め立てた。

足利は（本当に死ぬしかないか）、と考え、そういう結論を出した後は、死ぬことばかりを考え続けた。人生からあらゆる色彩が失われてしまった。一番腹立たしかったのが、プロ野球中継だった。そんな熱狂など、とうに彼とは全く無縁の世界になっていたからだだった。

平成四年（一九九二）十月十五日、足利の車は首都高速を快走していた。前夜、「申し訳ありません。命に換えてお詫びします」という遺書を書いた時には胸を掻き毟られるような肉体的苦痛を覚えたが、目を瞑るようになってそれを書き終えた後は、気持ちは吹っ切れており、（これでもう何もかも終わったのだ）、と思った。

近松門左衛門の「曾根崎心中」ではないが、「死ににゆく身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えてゆく」の心境だった。時速百キロ、足利はブレーキを踏むことなく、吸い込まれるように中央分離帯に激突して行った。激しい衝撃と轟音と共に車は宙を飛んだ。そして、地面に激しく落下すると、そのまま勢いよ

く回転して行った。

足利は気を失った。何分か、何十分かたって、激痛で意識が回復したが、その時には自分が死んでいるのか生きているのかさえ分からなかった。

結果的に、車は大破したが、救出された足利は奇跡的に打撲傷を負っただけで、結局は死ねなかったのだった。幸い後続車はなかったので、事故は足利の車の単独事故だけで終わった。

しかし、足利が地獄の底からよみがえってきてみれば、周りには彼よりもっと悲惨な運命に苦しめられている経営者が大勢いることを知った。

たとえば、昔からの親しい友人から頼まれて保証書に印をついたところ、友人の会社が倒産してしまった。保証書は2百億円の借金の保証書だった。バブルの時に、不動産投資に失敗し、経営に行き詰った。融通手形のキャッチボールをしていたばかりに、負債を数十倍にも膨らませてしまい、ニッチもサッチも行かなくなってしまった：等々である。

彼らは俗に「不渡り潰瘍」と呼ばれる症状のトス黒い顔をして、そこから抜け出す方途も分からないままに右往左往しているばかりだった。

そこから抜け出すにはもちろんプロのノウハウが必要なのだが、彼らにそういうものを持ち合わせているわけはなかった。

具体的には、倒産五法、会計、税法、商業・不動産・銀行取引の実際の流れ、資金繰り、企業組織、権限・決済のあり方等に実戦的な習熟が必要だった。

たとえば、この業界で呼ばれる「外科的手法」、財務のリストラと人のリストラ、そして不採算事業の切り離しの「三点セット」と民事再生法の申請によって不良債権の多くを放棄に持ち込み、残りの借金も、本業で利益を上げて徐々に返済していくということと折り合いをつけさえすれば、後は再建に必要な発想力と、歯を食いしばってに歯車を回していくための強靱な精神力と忍耐力があれば良かった。

そのために必要なプロのノウハウのかなりの部分は、すでにそれ以前の十四年間の国民債券信用銀行時代の業務の中で身につけており、それにプラスして、地獄の底から這いあがってきた経験が彼の精神を強靱なものに鍛え上げてくれていた。どれほどの修羅場に直面しても、彼は「壺の中の氷片」のように冷静で客観的であることができた。すでに失ったはずの命だから、もはや彼には恐れるものは何もなく、欲望さえも超越していた。

足利は、彼が再生可能と判断した企業、および、経営者に限り、求めに応じて再生を支援して行った。いくつかの成功例が重なっていくにつれ、足利には企業再生の依頼も増えて行った。足利の、特に得意の分野はホテル、リゾートの再生だった。やがて彼はこの分野の企業再生のプロになって行った。

二十年近くの間再生を手がけたホテル、リゾートなどの企業は二十社余りにのぼっていった。今、足利は、数社の小型ホテルを擁するホテル経営者になってさえいた。

おかしなもので、いつの間にか、彼は自分を騙した「先生」に一から鍛えてもらった実戦的ノウハウを資産にして、しぶとくビジネスを行っていった。

「先生」は足利を破滅の淵まで追いやりはしたが、彼が身を立て、生き抜いて行くための術の核となる実践的な知識だけは残しておいてくれたのだ。

足利は過酷な運命に翻弄されている経営者たちに「先生」伝授のノウハウを活用し、再生の手を差し伸べることを通じて、自分自身の再生をも果たして行ったのだ。彼はがむしゃらに仕事をこなし、出資者にも金を返済して行った。少なくとも八千万円以上は返したが、最後は「これ以上はできません」と文書で謝罪することで折り合いをつけるところまでこぎ着けることはできた。

壮大なる虚構の舞台装置

「おれは今、思うんだが」足利は話に区切りをつけたところで、自分が遭遇した運命を総括するように言った。

「かつておれが『先生』と呼んでいた相手は、おれ一人を標的に据えた上で、おれに接触するために、おれに関するあらゆる情報を綿密に調べ上げてかかってきたのだらうな」

だから、足利自身が生まれてさえいなかった以前にさかのぼって、彼の家の隣に昭和二十年頃、英国人とオーストラリア人が住んでいたというような事実まで突き止めたにちがいない。さらに、その家に住んでいた英国人になりすまし、家の地図をスラスラと書けるまでに訓練を積んだ上で足利の前に現れたのだ。

英国大使の子息、中央大学経済学部教授、英国秘密情報部員、「方丈記」の英訳者、吉田内閣のアドバイザリースタッフ：などといった輝かしい経歴もすべて巧妙に組み立てられたフィクションだった。

リック・チャールトンホテルはもちろん、実在のホテルである。「ジョン・B・ウィングゲート」、これはおそらくは偽名だろう、なる架空の人物がどのようにして実在の巨大ホテルの「副社長」になりすませることができたのかは分からない。ホテルの経営陣も従業員も彼の虚偽に騙されていたのか、あるいは、少なくとも一部は彼の一味であったのかさえ分からない。「ジョン・B・ウィングゲート」は実在のホテルに自らの架空の存在を巧妙に接ぎ木することによって、詐欺事件の壮大なる舞台装置を築き上げたのだった。

それだけの準備万端を整えた後で田舎者という劣等感をもっていた足利の弱点を見事について騙しにかかってきたのだ。

もちろん、足利の人脈力、投資家から資金を調達できる能力まで正確に値踏みし終えた上での大仕事だった。

帝国ホテルのステーキハウスでの会見の折に、「度胆を抜かれた」と語った足利の素直な告白に「はははは」と声高らかに笑ったのは「先生」の術中に足利がはまり込んできたという手応えを感じたがゆえの快哉の宣言だったにちがいない。

リック・チャールトンホテルの自家用ジェット機は、さながら、足利というシンデレラボーイの前に出現した魔法の「かぼちゃの馬車」だった。それによって米国に連れ出され、十鶴軒のホテルチェーンを連れ回されている間に、足利は完全に「先生」の掌の中で籠絡されてしまっていた。そんな彼に、「先生」はいよいよ最後の仕上げに誘導していったのだった。

「騙そうと思っているおれ一人のために、虚実織り交ぜた壮大な仕掛けを周到に用意した上で、騙しにかかることは極めて容易なことであったにちがいないよ」

足利は忸怩たる思いのこもった眼差しを浮かべて、口を閉ざした。が、すぐにまた、口を開いて言った。

「しかし、不思議なものでおれを騙した相手から教わった知識を武器に、おれは何とかこの世に生還することができたのだ」

二宮は、足利の白髪も、二十年は老けて見える風貌も壮絶な格闘の勲章だったの

だ、と感じ、友を誇りに思った。